

中野オープンストリート計画

ー 中野カルチャーを紡ぐ交流の拠点 ー

Keywords

サブカルチャー 商店街 知識の蓄積
生生流転する空間 能動的空間 受動的空間



DZ22193 磯崎 真緒

1. はじめに

今回私が卒業制作として選定したテーマは「人が自ら考え体験する空間」である。情報も空間も溢れている東京だからこその体験とは何か。人の思考を止めず、考え発信していく空間を求める。

2. 研究背景

2.1 SNSでの体験

私はSNSをよく使う。SNSには“TL”（タイムライン）やリールのような情報が無限に流れてくる機能がある。そして私はそれを無心で見ると。時々気になったものがあり、検索してみたり、作ってみたり、お店に行ったりと行動する。行動したものは自分の記憶に残り、自分の知識として蓄えられていく。しかし、流れるように見えていたものは何も自分に残らない。つまり、自分自身で何か考え、行動したモノしか自分には残らないのだ。

2.2 生生流転する東京

東京という大都市は、一番情報やモノが集まる都市である。人口増加に伴い、床面積を増やしたが、効率性を求めた結果、周囲には様々なものが溢れているのにも関わらず、それらは流れて行ってしまう。人口増加や生産性の向上のため床面積を増やすことは重要である。しかし、その増やし方は人々から能動的な行動を奪う。1番世の中の変化に近い場所、生生流転する場所、”東京“だからこその体験を行うべきだ。

2.3 創作者とSNS

SNSは情報に沢山触れることができるものの、実際にその物を知識として自分のものにするには一歩踏み出す必要がある。これは東京という街にも同じことがいえるのではないかと。そして、流れている情報もある程度制御することで自分自身に必要な、興味を持った情報が出てくる。空間も、何を見せるか制御することで人の興味関心は制御することができる。

モノを創る創作者は、社会に対し自身の考えをもつ。そしてそれを作品に反映させながら、人々に共有していく。これは、情報を手に入れ、自分の中で自分のモノにし、他人に共有する。効率性や時間というものに囚われ

る社会の中で、1度咀嚼をすることを行う。それらを他人と共有する。これが東京に必要とされている空間なのではないか

2.4 日常の中にある場所

創作者を私たちは「特別な人」と一線を引く。しかし、私たちは誰しも創作者になる可能性を持っていて、誰しもが自分の意見を持ち発信することが出来る。創作者たちがいることが日常であることが必要とされる。私は東京に住む人の日常、それは駅であると考えた。東京は駅を中心に栄えており、通勤通学、どこに行くのでも駅を利用する。平日休日関係なく利用し、私たちの生活の一部である。

3. 研究目的

地方の地域活性化や商店街の再開発が話題として挙がるが、東京にも課題は山積みである。人が多く、賑わっているように見えるものの実際に表面には表れていない課題があると考えた。私はこれに目を付け、東京だからこその課題に向き合う。探索・体験・共有を行う空間の構築
創作者が集う場
これらを東京の日常に浸透する空間を考える。

4. 対象地域

4.1 中野サンモール

今回対象とした敷地は中野駅北口から延びる商店街”中野サンモール”である。中野駅は朝から夜まで多くの人が利用する。東京の東西を結ぶ中心地であり、中野駅は様々な人が利用する。そして、駅から繋がる中野サンモールは駅と住宅を結ぶ通り道となっている。アーケード街で周辺には中古屋が集まる中野ブロードウェイやふれあいロードや昭和新冠商店街などの繁華街がある。

4.2 歴史(江戸ー戦前)

中野は江戸時代から江戸と青梅付近の西側を結ぶ青梅街道を中心として栄えていた(写真1)。しかし、鉄道の

開通に伴い、中心地が現在の中野駅の方面、北側へ移動していく。中野が本格的に栄始めたのは、関東大震災の際に避難先として都心から人々が移住してからである。その後中野は空軍の敷地や軍学校などがつくられ栄えていく。

4.3 歴史(戦後)

太平洋戦争の際は副都心であったこともあり、空襲は都心部に比べると被害が小さかった(写真2)。戦争の影響を大きく受けたのは、戦後である。戦後、日本には多くのヤミ市が形成されていく。中野も例外ではない。新宿のすぐ横に位置し、物流も盛んであったため、中央線沿い最大のヤミ市が形成される。このヤミ市は現在も繁華街に形を残している(写真3)。ヤミ市が整備されてからは、北口には中野北口美観商店街が形成され、これが後に中野サンモールとなる。周囲には中野サンプラザや中野ブロードウェイが建てられていった。

4.2 歴史(現代)

現在中野は駅周辺には大学などの学校や、アニメーション会社などがある。中野ブロードウェイはマニアが集まる中古屋や専門店として、サンモールの東側は繁華街としてだけではなく、昼間も多くの人で賑わっている。中野も高齢化は進んでいるものの20,30代の生産世代が多く、また単身世帯が多いことも挙げられる。

5. プログラム

5.1 提案

中野サンモールは、住宅街と中野駅を結ぶ商店街である。人通りは多いものの、チェーン店が立ち並び、利用者の多くは「屋根がある便利な道」として利用している。一見栄えているように見えている商店街だが、街の色を持つ、地域の人の交流の地であった商店街の姿は失われている。さらに道幅が狭く、人、モノの溢れだしは難しく何かあるのかわからないことも問題点として挙げられる。

そこで私は、中野サンモールに新たな商店の在り方を提案する。

(概要)

アーケードの新設

創作者が集う場の形成

人の活動が見える空間

中野サンモールに「共有するエリア」「制作するエリア」「考える・交流するエリア」の3エリアに設定し、設計を行う。それぞれのエリアの設計する用途は以下に記す。

(共有するエリア)

ギャラリー/コラボカフェ

(制作するエリア)

書店/画材専門店/道具専門店

(考える・交流するエリア)

集合住宅・料理研究所

5.2 手法

中野サンモールが通り道化、中野の色を持たないという問題に対し以下の手順で設計を行う

1. 中野駅北口の特徴をスケッチ
2. 建築空間として反映できる要素を抽出
3. 家具となる要素を抽出し、空間を構成
4. 建物と建物を結ぶアーケード空間を設計

今回アーケードはただ雨風を凌ぐ屋根としての設計ではなく、人々の活動が見える化し、活動を道に対して溢れだしを生み出す空間として設計を行う。また建物同士をアーケード上で繋ぎ、交流を促す空間を設計する

参考文献

- 1) 2022年度関東支部研究発表会のお知らせ <http://news-sv.aij.or.jp/kanto/>
- 2) 学校法人 芝浦工業大学の概要 <http://www.shibaura-it.ac.jp/about/outline.html>
- 3) 芝浦工業大学建築学部建築学科：2021年度建築学科卒業研究梗概集, pp.●-●, 2022年3月